九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中晩唐における華清宮の零落

竹村, 則行

https://doi.org/10.15017/2332593

出版情報：文學研究. 87, pp.53-82, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

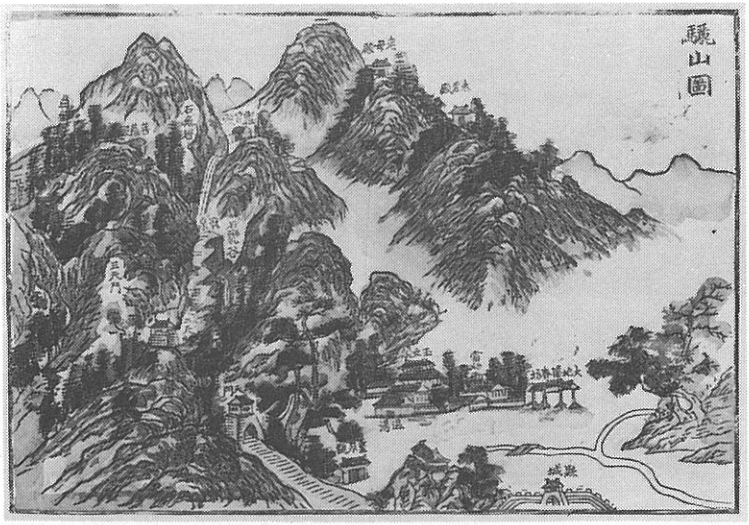
中晩唐における華清宮の零落

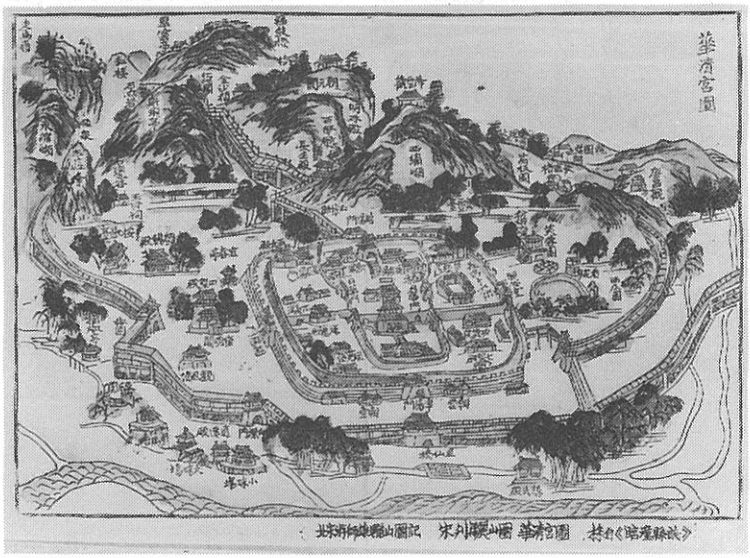
竹村則行

一

驪山の華清宮をめぐる玄宗と楊貴妃の艶話は人々の遍く知るところである。盛唐の玄宗は、この長安東郊のリゾート温泉をいたく好み、毎年十月になると、避寒の為に、楊貴妃を伴ってこの温泉に行幸するのが恒例であった。当然に、華清宮は皇帝と愛妃の行宮にふさわしく壮厳を極めた。とりわけ天宝六載（七四七）、玄宗が楊貴妃の歓心を買うべく、それまでの温泉宮を麗々しく華清宮と改めてから、安禄山の乱（七五六年）までの約十年間は、その栄華の絶頂期であった。奇しくも、この間の開元天宝時代は唐朝の絶頂期であり、また中国史上稀に見る繁栄期でもあった。

この小稿は、しかし、その〝強者どもが夢の跡〟、中唐晩唐期において、華清宮が如何に急速且つ無残に荒廃していったかを主たる考察の対象とする。その繁栄は衰落の序章でしかない。後述する如く、玄宗の治下、無上の栄華を誇った華清宮も、安禄山の乱（七五六年）、魚朝恩の破壊（七六七年）、及び会昌の廃仏（八四五年）の打続く災禍を経て、中晩唐期には見る影もなく衰残し、竟に五代後晋期には霊泉観として道士に下賜されるに至る。実に急激な盛者必衰の事理であった。にもかかわらず、驪山の温泉自体は、自然の摂理としてこの間も変らず湧出していたのである（今





騒山図・華清宮図

（『臨潼縣志』による。
但し着色は今人のもの。）

日の湧出量一一二t/h、温度四三℃)。[1]また年年歳歳、季節が巡って来れば樹木は繁茂し、相思樹は紅い実をつけた。このような華清宮の実状を見るにつけ、長安洛陽の要路に位置するこの温泉に旅途の黄塵を洗い流した歴代の詩人は、こぞって玄宗楊貴妃の盛時を偲び、うたた昔日の感に打たれて詩作の筆を執ったのである。

小稿においては、それらの詩文資料のうち、中晩唐期の詠華清宮詩を史実資料として用いることにする。盛唐に続く中晩唐の詩人は、華清宮の衰落に一体何を見たのであろうか。虚飾誇大を常とする詩句表現を現実の資料として用いることに躊躇しないわけではない。しかし、中晩唐時代は盛唐の遺民もまだ生存しており、盛唐の見聞も頗る現実的である。その華清宮描写もリアルで迫真性がある。よしんば、それらの資料が伝聞にもとづく虚飾表現であったとしても、そこに何がしかの真実性を読み取ることは可能であろう。

以上の観点から、小稿では、多岐にわたる調査の洩れを恐れず、中晩唐における華清宮の零落ぶりを文献資料的にまとめてみることにする。このことによって、華清宮の衰亡史に一つの新たな資料を提供し、あわせて、華清宮にまつわる楊貴妃故事が中晩唐期において様々に伝説化してゆく過程を明らかにしたいと願うものである。

二

華清宮についての記録は、盛中晩唐の詩中に表現されたものを除けば、唐・李吉甫の『元和郡縣圖志』[2]巻一に、

華清宮、在驪山上。開元十一年、初置温泉宮、天寶六年(ママ)改爲華清宮。

とあるのが比較的早い。その後、唐代の記録としては、

陳鴻「華清湯池記」[3]
鄭處誨『明皇雜録』[4]巻下

などに、温泉浴池の構造について概説するが、いずれも断片的一面的であり、華清宮について総合的に記述したものではない。

宋代の資料では、多く筆記小説類に華清宮の栄華が回顧される。そのうち目ぼしいものでは、王讜の『唐語林』[5]巻五の次の記事があげられる。

驪山華清宮、天寶中、植松柏徧滿巖谷、望之鬱然。朝元閣在北嶺之上、最爲嶄絶。次南、卽長生殿。殿東南、湯泉凡一十八所。第一卽御湯、周環數丈、悉砌白石、瑩徹如玉。石面皆隱起魚龍花鳥之狀。四面石座、階級而下。中有雙白石甕、連腹異口。甕口中復植雙白石蓮、泉眼自蓮中涌出、注白石之面。御湯西南、卽妃子湯、湯稍狹。湯側有紅石盆四所、刻作菡萏于白石之面。餘湯迤邐相屬而下、鑿作暗竇走水、出東南數十步、復立一石表、湧出灌注一石盆中、後人爲也。

周勛初『唐語林校證』[6]巻五によれば、この記事の原出は『賈氏談録』である。また宋・錢易の『南部新書』[7]巻己にも同様の記事がある。これらは、主に華清宮の浴池について解説したものである。

さらに、宋・劉斧の『青瑣高議』[8]前集巻六には、張淪「驪山記」、秦醇「温泉記」を収めるが、これらは当時この地に伝えられた華清宮をめぐる楊貴妃伝説を記録したものであり、華清宮の実態よりも、むしろ楊貴妃の伝奇小説資料としての価値が高いものである。

次に、華清宮について記録した宋代の資料のうち、最も客観的で史料性に富むと思われるのは、宋敏求『長安志』[9]巻十五、及びそれに拠った程大昌『雍録』[10]巻四の記述である。ここには、後出の『雍録』巻四の記述をあげる。該書には、「華清宮図」とともに、以下の華清宮の宮門・樓閣・浴殿について順次紹介する。

津陽門（正門）・開陽門・望京門・瑤光樓・飛霜殿・九龍殿（御湯＝蓮花湯）・玉女殿・七聖殿・宜春亭・重明閣・四聖殿・長生殿・集靈臺・朝元閣・老君殿・鏡樓・明珠殿・筍殿・觀風樓・鬪雞殿・按歌臺・毬場・連理

木・飲鹿槽・丹霞泉・羯鼓樓（これらの位置については別掲写真参照）

『雍録』は、この記述のあとに「温泉説」を載せ、白居易の「長恨歌」にいう「春寒賜浴華清池、始是初承恩幸（ママ）時、七月七日長生殿」、また杜牧「過華清宮」詩にいう「一騎紅塵妃子笑、無人知道荔枝（ママ）來」の詩表現が史実に合わないことを逐一論証している。以上には、唐宋における華清宮の記録について、一般的で且つ客観的と思われるものをあげた。

次に、中晩唐にかけて急速に衰落していった華清宮の変貌ぶりに言及した資料について見てみることにする。まず、宋・銭易の『南部新書』[7]巻己に次の記事がある。

驪山の華清宮は毀廢已に久し。今存する所の者は唯だ繚垣のみ。天寶に植うる所の松柏遍く巖谷に滿ち、之を望めば鬱然たり。屢ば兵寇を經と雖も斫伐を被らず。

ここで銭易は、華清宮が毀たれ廃れて既に久しく、今はただ周囲の繚垣が残っているだけであること、しかし、天宝時に植栽した松柏は巌谷に鬱蒼と茂っており、何度かの兵乱を経ても伐採されなかったことを述べている。禁域驪山の樹木の伐採を禁じたことは、早く開元四年に出された玄宗の「禁驪山樵採敕」[11]に見えるものである。

さらに、宋・鄭剛中の旅行記「西征道里記」[12]には、

山間の宮殿、基址皆在り。

とあり、鄭剛中の目睹した華清宮は、既に基址のみが壘壘と連なる廃墟となっていたことが想像される。

続いて、以下の四種の資料においては、華清宮零落の記述がほぼ同様であり、後出作品が先行作品の記述を巧みに述作したものの様に思われる。試みにそれらを古い順に並べれば次の通りである。

①祿山亂後、天子宰復遊幸。唐末、遂皆圮廢。晉天福中、改爲靈泉觀、賜道士居之。

（宋・宋敏求『長安志』巻十五……一〇七六熙寧五年成立）

②逮祿山亂、天子遊幸益鮮。唐末遂廢。晉天福中、改曰靈泉觀、以賜道士。（略）時元祐三年（一〇八八）中秋日。

（宋・遊師雄『驪山圖記』[13]）

③祿山亂後、罕復遊幸。唐末、遂皆隳廢。

（南宋・程大昌『雍録』巻四）

④右華清宮、經祿山亂後、巡幸絶少、唐末遂廢。晉天福中、改靈泉觀、以賜道士。

（『臨潼縣志』巻二……清、一七七六乾隆四一年成立）

この一連する四種の記録が共通して述べていることは、華清宮は、安祿山の乱後、天子の行幸が絶えてなくなり、唐末になって毀廃し、遂に五代後晋の天福中（九三六―九四三）には靈泉観として道士に下賜されたということである。以上にあげた華清宮の零落を伝える記事が、もしそのまま実状を伝えているとすれば、先にあげた『長安志』『雍録』中における華清宮図、及び宮門・楼閣等々の一一の説明は、蓋し華清宮の在りし日の栄華を記録した備忘録であったと言わねばならないであろう。

三

以上の記録が如実に示すように、中晩唐において華清宮が急速に衰落した原因として、ここでは次の三因を考えてみる。

①安祿山の乱（七五六年）
②魚朝恩の破壊（七六七年）
③会昌の廃仏（八四五年）

①安祿山の乱

盛唐の終焉をもたらした安祿山の反乱軍は、天宝十五載（七五六）六月十六日には既に驪山の華清宮を占領していたと思われる。[14] その安祿山軍が、特に華清宮を焼打ち破壊した記録は見当らない。玄宗によって華清宮に豪邸を下賜されていた安祿山に、[15] 華清宮を破壊する積極的な理由は見つからない。もし小規模の破壊があったとすれば、それは安祿山軍の粗暴さに起因するものであったろう。にもかかわらず、ここに安祿山の乱を華清宮衰落の最大要因としてあげるのは、蓋し安祿山のクーデターが盛唐の繁栄に終焉をもたらし、楊貴妃を失った玄宗の華清宮行幸がこれより杜絶したからである。[16] 人為による栄華は、必ず人為によって衰落する。華清宮もまた、玄宗という最高権力の手厚い庇護によって無上の栄華を遂げた以上、その玄宗の盛唐時代の終焉と共に、栄養分の供給を断たれた精華の如く、衰落枯死の一途をたどるのは必定であった。

②魚朝恩の破壊

安祿山の乱が華清宮衰落の原則的な要因とすれば、魚朝恩の華清宮破壊は現実的な原因であった。即ち、『旧唐書』巻一八四、魚朝恩伝[17]に拠れば、

> 大暦二年（七六七）、朝恩獻通化門外賜莊爲寺、以資章敬太后冥福。仍請以章敬爲名、復加興造、窮極壯麗。以城中材木不足充費、乃奏壞曲江亭館、華清宮觀樓及百司行廨、將相没官宅、給其用。土木之役、僅逾萬億。

つまり、代宗の大暦二年（七六七）、魚朝恩は通化門外に賜った別荘を章敬寺として献上し、今上皇帝（代宗）の母君にあたる章敬太后の冥福を祈ることにしたが、その際、木材の不足を補うために、曲江の亭館や華清宮の観楼を取り壊して建築資材に充てたのである。この時に破壊の対象となった「華清宮の觀樓」が、数ある華清宮のどの建物を具体的に指すのか定かではない。[18] しかし「壯麗を窮極めた」からには、章敬寺の建築は大規模で豪華なものであったはずであり、従って、華清宮の破壊も「公」権力による大規模で壊滅的なものであったであろう。華清宮は、玄宗とい

う当時の絶対権力者が楊貴妃の歓心を買うべく建立したのであるが、その資材は、やがて二十年後、玄宗の長子粛宗の皇后であると同時に今上皇帝（代宗）の母君に当る章敬太后の冥福を願って建てられた章敬寺の資材として再活用された。皮肉なめぐりあわせながら、このことは資材としてはまだしも幸せな運命にあったといえようか。ただそこに、宦官魚朝恩の阿世の俗心が仄見えるいやらしさを除けばである。

③会昌の廃仏

会昌の廃仏は、武宗の会昌年間（八四一―八四五）に発動された仏教弾圧事件である。その経緯については『旧唐書』巻十八上、武宗本紀に詳しい。また制令としては会昌五年（八四五）に発令された「毀佛寺勒僧尼還俗制」[19]がある。更に当時偶ま渡唐していた円仁の『入唐求法巡礼行記』にその実態が記録されていることもよく知られている。この会昌の廃仏については、既に中国仏教史や円仁研究の立場から各種の研究が進められている。[20] 小稿においては、これらの先行業績を踏まえつつ、この会昌の廃仏が華清宮においてはどのように影響したかについて考えてみることにする。その具体的事例として、晩唐の詩人鄭嵎の「津陽門詩」[21]において、会昌の廃仏における華清宮内の仏寺破壊の惨状が以下のように生々しく描かれている。

會昌御宇斥内典　会昌の御宇　内典を斥(しりぞ)け
去留二教分黄緇　去(のぞ)くと留まると　二教　黄緇を分つ
慶山汙瀦石甕毀　慶山は汙瀦となり　石甕は毀たる
紅樓綠閣皆支離　紅楼・緑閣　皆支離たり
奇松怪柏爲樵蘇　奇松　怪柏は樵蘇と爲り
童山舁谷亡嶮巇　童山　舁谷に嶮巇亡(な)し
煙中壁碎摩詰畫　煙中　壁は砕く　摩詰の畫

雲間字失玄宗詩　雲間　字は失す　玄宗の詩
石魚巖底百尋井　石魚巖底　百尋の井
銀牀下巻紅綃遅　銀牀　下に巻きて　紅綃遅し
當時清影蔭紅葉　当時　清影　紅葉を蔭うも
一旦飛埃埋素規　一旦　飛埃　素規を埋む
韓家燭臺倚林杪　韓家の燭台　林杪に倚り
千枝燦若山霞擲　千枝の燦たること　山霞擲くが若し
昔年光彩奪天月　昔年　光彩は天月を奪うも
昨日鎖鎔當路岐　昨日　鎖鎔せられて　路岐に当る
龍宮御榜高可惜　龍宮の御榜　高きこと惜づべきも
火焚牛挽臨崎嶇　火焚き　牛挽き　崎嶇に臨む
孔雀松殘赤琥珀　孔雀松は残す　赤琥珀
鴛鴦瓦碎青琉璃　鴛鴦の瓦は砕く　青琉璃

周知の如く、会昌の廃仏は主に仏教の排斥を意図したものであり、武宗自らも道士であったところの道教は保護される方向にあった。華清宮には朝玄閣など道教建築物も多数あったが、また仏寺も驪山の周辺に併せて混在していた。会昌の廃仏においては、この仏寺が毀仏の対象となって徹底的に破壊された模様である。まず慶山寺（持国寺）や石甕寺、更に紅楼や緑閣が跡形もなく毀たれる。松柏は伐られてたき木となり、禿山や枯谷が現出する。楼閣にあった王維の山水画や玄宗の題額も消失する。文字通り巌下の石甕から水を汲んだ石甕寺も今は塵埃に埋没し、韓国夫人の千枝灯も今は壊されて路傍に捨てられている。龍楼に掲げてあった睿宗の寺額も火災に消失し、残った孔雀松の下に

は赤茨苓が生え、玄宗と楊貴妃の結婚記念の鴛鴦の瓦が破砕されて一面に散在する惨状である。

この「津陽門詩」の作者鄭嵎の経歴は明らかでないが、『全唐詩』巻五六七には大中五年（八五一）の進士とある。（更に古くは『郡斎読書志』巻一八、『唐方子伝』巻七）また詩中の老人の述懐に、

開元到今踰十紀　開元より今に到るまで　十紀を踰え
當初事跡皆殘隳　当初の事跡　皆残隳せり

とあるところからすれば、この詩は、開元年間（七一三―七四一）より「十紀」（一二〇年）余りを経た九世紀半ば、ほぼ作者の進士及第前後の作品と見ることができる。いずれにしても、安祿山の乱より約百年後、今また会昌の廃仏（八四五）後間もなく詠まれたと思われるこの鄭嵎の「津陽門詩」に描写される華清宮の衰落ぶりは、多分に含む詩的誇張を差引いても、その大筋においては実態を活写していると考えてよいであろう。

以上、縷縷述べ来ったように、安祿山の乱、魚朝恩の破壊、それに会昌の廃仏という、いずれも人為的な要因によってその繁栄の命脈を決定的に断たれた華清宮は、中晩唐期を経て、見る影もなく零落してゆく。そして、このような華清宮の残映が先述の宋人の記述中に巧みに描写されていたのである。してみると、史実にもぴたり符合する中晩唐及び宋文人の華清宮零落表現は、かなり実景を伝えた信憑性の高いものであるということができる。

四

さてここで、その華清宮の零落にまつわる興味深い史実を紹介することにする。それは、盛唐の玄宗時には恒例であった皇帝の華清宮行幸が、中晩唐の皇帝によって時たま計画されると、濫費や不吉を理由に、しばしば臣下によって諫止されていることである。つまり、中晩唐期には華清宮が宛も幽霊館の如く忌み嫌われたのである。いま、その

好例を、穆宗、敬宗、宣宗の華清宮行幸、そして、当時の臣下であった元稹や杜牧の文書中に見ることができる。

まず、元和十五年（八二〇）十一月、華清宮行幸を計画した穆宗は、臣下に切諫されたものの、敢えてそれを強行している。即ち、『資治通鑑』巻二四一、憲宗元和十五年（八二〇）十一月の条に次の如く記する。（『旧唐書』では巻十六、穆宗本紀）

十一月……上將幸華清宮。

戊午、宰相率兩省供奉官詣延英門、三上表切諫、且言「如此、臣輩當扈從」。求面對、皆不聽。諫官伏門下、至暮、乃退。

己未、未明、上自複道出城、幸華清宮。獨公主、駙馬、中尉、神策六軍使帥禁兵千餘人扈從、晡時還宮。

ここでは、臣下が何故に穆宗の華清宮行幸を強く諫止したかが重要である。その理由は、当時穆宗の中書舎人であった元稹の「兩省供奉官諫駕幸温湯状」[23]に次の様に明言されている。

今月（注：元和十五年十一月）二十一日、車駕温湯に幸せんと欲す。

右、臣等伏して以へらく、温湯に駕幸するは、始め玄宗皇帝よりす。開元致理の後に乘り、天寶盈羨の秋に當り、殿宇を驪山に葺き、官曹を昭應に置き、繚垣の内に警蹕し、馳道の中を周行し、萬乘齊しく驅り、有司盡く去る。朝會を妨ぐる無く、戒嚴を廢せず。而るに猶ほ物議喧囂として、財力は耗竭し、數年の外に天下蕭然たり。累聖已來、深く覆轍に懲り、驪宮は圮毀し、永く修營を絶つ。官曹は盡く田萊に復し、殿宇は半ば巖谷に堙む。深林に逸才の獸有りて、環山に匡衛の廬無し。

陛下若し騎從もて輕馳すれば、則ち道途に拱辰の備え無し。若し乘輿を稍具すれば、則ち邑縣に駕肩の憂有り。若し帳殿に宿張すれば、則ち原野は徼巡の所に非ず。若し鑾車夕に入らば、則ち門禁啓閉の時を失す。六軍は空宮を守衛し、百吏は私室に宴安す。臣子爲るを忝くして、誰か惕然たらざらん。

況んや陛下は新たに寶圖を御し、將に大典を行はんとす。郊天の儀方めて設け、謁陵の禮未だ遑あらず。遽かに温泉の行有らば、人神の望を失はんことを恐る。臣等謬りて榮近に居し、死を冒して上言せんとす。

この文における元稹ら供奉官の穆宗諫止の要旨は、穆宗は新たに皇帝に即位したばかりであるから、何につけ多大な財力を消耗する華清宮行幸は見合わせるべきであるということである。そして、この上奏文中に述べられる「累聖已來、深懲覆轍、驪宮圮毀、永絶修營。官曹盡復於田萊、殿宇半堙於巖谷」という文言は、元和十五年（八二〇）のこの当時、華清宮が如何に衰落していたかを如実に表現している。なお、穆宗は華清宮行幸が余程お気に入りだったらしく、『資治通鑑』巻二四二、穆宗長慶二年（八二二）の条にも、

冬十一月、庚午、皇太后幸華清宮。辛未、上自複道幸華清宮、遂畋于驪山、即日還宮。太后數日乃返。

と記している。

次では、十七歳で即位したその子敬宗の華清宮行幸にまつわる故事である。『資治通鑑』巻二四三、敬宗宝暦元年（八二五）の条に次の記事がある。

冬十月、……上（敬宗）欲幸驪山温湯、左僕射李絳、諫議大夫張仲方等屢諫不聽、拾遺張權輿伏紫宸殿下、叩頭諫曰、「昔周幽王幸驪山、爲犬戎所殺。秦始皇葬驪山、國亡。玄宗宮驪山而祿山亂。先帝（穆宗）幸驪山、享年不長」。上曰、「驪山若此之凶邪？我宜一往以驗彼言」。十一月、庚寅、幸温湯、即日還宮、謂左右曰、「彼叩頭者之言、安足信哉！」

ここには、臣下の諫めも聞かず、華清宮行幸を敢行して得意然とする十七歳の青年皇帝の面目が躍如として現れている。ここでは、拾遺張權輿の諫言中に、周幽王や秦始皇、それに玄宗や先帝穆宗の例を引きつつ、皇帝の華清宮行幸を凶事として把えている点が注目される。やんちゃな青年皇帝への説法もあるだろうが、ここでは驪山の華清宮は、宛も幽霊館の如き不吉の象徴でしかないのである。

さて、『通鑑』のこの記事が拠ったと思われる故事は、実は杜牧の文中に見えるものである。則ち『樊川文集』巻十二「與人論諫書」[24]中に、直諫することの難しさを論じて、

近者寶曆中、敬宗皇帝欲幸驪山。時諫者至多、上意不決。拾遺張權輿伏紫宸殿下叩頭諫曰、「昔周幽王幸驪山、爲犬戎所殺。秦始皇葬驪山、國亡。玄宗皇帝宮驪山、而祿山亂。先皇帝（穆宗）幸驪山、而享年不長」。帝曰、「驪山若此之凶耶？我宜一往以驗彼言」。後數日、自驪山廻、語親倖曰、「叩頭者之言、安足信哉！」

とあるのがそれである。（比較対照の為に、『通鑑』、杜牧文の双方を原文のまま掲げた。なお、宋・王讜『唐語林』巻六にもこの部分の記事を引用する。）司馬光が『通鑑』を撰した時に、直接に拠った資料が何であったか、私は寡聞にして知らない。しかし、敬宗の驪山宮行幸を諫めた『通鑑』の記事がそっくりそのまま杜牧の文中に見えるのは、当然そこに何かの必然的な理由があるであろう。（因に言えば、この年宝暦元年、二十三歳の杜牧は敬宗の宮殿建築の奢侈を諫めて「阿房宮賦」を詠んでいる。）

最後に、宣宗は大中十一年（八五七）に、やはり華清宮に行幸しようとして臣下に諫止されている。即ち『資治通鑑』巻二四九、宣宗大中十一年（八五七）の条に、十一年、春、正月……上欲幸華清宮、諫官論之甚切、上（宣宗）爲之止。とあるのがそれである。この時の宣宗の詔命は、『旧唐書』巻十八下、宣宗本紀、及び『全唐文』巻八十に「答兩省諫幸華清宮詔」として載せられている。

さて、以上の穆宗・敬宗・宣宗の故事から、中晩唐における華清宮が荒廃の極みに達しており、皇帝の行幸は経費の面からもままならぬことが分った。この廃墟にも等しい華清宮がまるで幽霊館のように不吉なものとして恐れられていたのは、朝廷のみならず、民間においてもそうであり、それは、次章に紹介する中晩唐の詠華清宮詩中に如実に反映されることになる。

五

元和四年（八〇九）に詠まれた白居易の「新楽府」五十首中に「驪宮高」[25]がある。これは濫費をいましめて天子の華清宮行幸をやんわりと諷諭したものだが、その中の一句に、

翠華不來歳月久　翠華來らずして　歳月久し
牆有衣兮瓦有松　牆に衣有り　瓦に松有り

とあるのは、天子の行幸が絶えて久しく、荒れ放題の当時の華清宮の実態を反映した表現であると見られる。

白居易はまた、「江南遇天宝楽叟」[26]詩において、次のように華清宮の零落ぶりを描写する。

我自秦來君莫問　我れ秦より來れり　君問ふ莫れ
驪山渭水如荒村　驪山　渭水は荒村の如し
新豐樹老籠明月　新豐の樹は老い　明月を籠め
長生殿闇鎖黄昏　長生殿は闇く　黄昏に鎖づ
紅葉紛紛盖敧瓦　紅葉は紛紛として　敧ける瓦を盖ひ
緑苔重重封壞垣　緑苔は重重として　壞れし垣を封ず

また、同じく「梨園弟子」[27]詩は次の如く華清宮の今日の情況を述べる。

白頭垂涙話梨園　白頭　涙を垂れ　梨園を話る
五十年前雨露恩　五十年前　雨露の恩
莫問華清今日事　問ふ莫れ　華清今日の事
滿山紅葉鎖宮門　滿山の紅葉　宮門鎖づ

先にあげた中唐の華清宮の実状を伝える諸資料（就中元稹の「兩省供奉官諫駕幸温湯状」）からすると、白居易のこれらの詩に描写された華清宮の零落ぶりは、むろん詩的誇張を含みつつも、基本的には実態表現に近いと考えられる。されば、白居易が「長恨歌」を詠んだ元和元年（八〇六）には、華清宮は既に魚朝恩の破壊を経て見る影もなく衰落していたのであり、従って有名な次の華清宮描写は、全くの架空想像表現となる。

春寒賜浴華清池　温泉水滑洗凝脂
侍兒扶起嬌無力　始是新承恩澤時

また、韋応物の「温泉行」詩は大暦二年（七六七）頃に詠まれた[28]と思われるが、そこには魚朝恩の破壊直後の華清宮の様子が次のように痛々しく詠まれる。

今來蕭瑟萬井空　唯見蒼山起煙霧

さて、華清宮の零落を叙事的に詠み込むのは鄭嵎の「津陽門詩」[21]である。この詩は、或る冬の寒風吹き荒ぶ中、華清宮の北門である津陽門あたりに宿泊した作者が、宿の古老の語る百年以上も前の玄宗と楊貴妃の故事を書き留めたという構成をとる。この老人の口から華清宮の栄枯盛衰が語られるのであるが、その中の華清宮の衰落に関する部分は次のようである。

鑾輿卻入華清宮　滿山紅實垂相思
飛霜殿前月悄悄

迎春亭下風颼颼　迎春亭下に風颼颼たり
雪衣女失玉籠在　雪衣女は失して　玉籠のみ在り
長生鹿痩銅牌垂　長生の鹿は痩せて　銅牌垂る
象牀塵凝罨颯被　象牀に塵は凝む　罨颯の被
畫檐蟲網頗梨碑　畫檐に蟲は網はる　頗梨の碑

この部分は、粛宗の乾元元年（七五八）十月、前年に蜀より還御した明皇（玄宗）が、単独で、亡き楊貴妃との思い出の地華清宮へ行幸した際の描写である。馴染みの相思樹は相変らず赤い実をつけているが、楊貴妃のいない飛霜殿も迎春亭も寂しい限りである。白鸚鵡の雪衣女を飼っていた鳥籠は放置され、宜春苑の牌を刻した鹿は痩せこけている。名残りの罨颯公主の被衣には塵が積もり、温泉堂の頗梨碑には蜘蛛が巣を張っている仕末である。

鄭嵎の「津陽門詩」において注目する点は、華清宮の盛衰が一古老によって語られていることである。このことは、引用した華清宮の零落ぶりを含む楊貴妃伝説が、既にこの時期において、いわゆる語り部によって物語り化され、伝説化されつつあったことを端無くも物語るものである。

次に、杜牧の「華清宮三十韻」[29]詩にも、華清宮の興亡を叙した中に、その零落ぶりを伝える描写がある。

碧簷斜送日　碧簷　斜めに日を送り
殷葉半凋霜　殷葉　半ば霜に凋む
迸水傾瑤砌　迸水　瑤砌を傾け
疎風罅玉房　疎風　玉房に罅く
塵埃羯鼓索　塵埃の羯鼓の索
片段荔枝筐　片段の荔枝の筐

鳥啄摧寒木　鳥啄きて　寒木摧かれ
蝸涎蠹畫梁　蝸　涎して　畫梁　蠹まる

杜牧のこの詩の制作年代は分らない。繆鉞『杜牧年譜』[30]は、次にあげる温庭筠（？）の和詩が「華清宮和杜舎人」となっていることから、杜牧のこの詩を中書舎人となった大中六年（八五二）の頃に入れている。もしそうであれば、杜牧の「華清宮三十韻」詩は、先にあげた鄭嵎の「津陽門詩」とほぼ同時期の制作となり、甚だ興味深い。しかし、次にあげる如く、「華清宮和杜舎人」詩の制作者は、温庭筠の他に張祜・趙嘏・薛能の計四名が重出するのであり、まずこの作者を特定する必要がある。それに、杜牧のこの詩と和杜舎人詩とが必ずしも同一年時の作である必要は無く、従って杜牧が中書舎人であったその時にこの「華清宮三十韻」詩を詠んだとは断言できない。かてて加えて、杜牧詩には想像をめぐらした伝奇的要素が豊富である。[31]例えば有名な「過華清宮絶句」其一詩にしても、

長安廻望繡成堆　長安　廻望すれば　繡　堆を成す
山頂千門次第開　山頂の千門　次第に開く
一騎紅塵妃子笑　一騎　紅塵　妃子笑ふ
無人知是荔枝來　人の　是れ荔枝の来るを知る無し

とあるが、上来引証した様に、杜牧の当時における華清宮の惨状からすれば、この詩は専ら杜牧の想像による伝奇的な要素を多分に含む詠史詩であると言える（其二其三も同じ）。「華清宮三十韻」詩についても、果して想像の産物であるのか、実態の反映であるのか、多分に疑念は残る。或いは鄭嵎の「津陽門詩」のように、華清宮の故事を語る語り部の存在があったのかも知れない。しかし、仮に華清宮の零落描写が想像上の産物だとしても、塵埃にまみれた羯鼓の索や荔枝筐の片われ、それに蝸牛の延った跡の残る画梁など、先にあげた記録資料から推しても、奇妙に現実性のある描写として我々に訴えかける迫真性がある。杜牧の「華清宮三十韻」詩における華清宮零落の描写は、現場から

の生々しい報告ではないかも知れぬが、晩唐詩人の眼に映った華清宮の映像として、まずは何がしかの真実を伝え得ているであろう。

続いて、「華清宮、和杜舎人」[32]詩においても同様の華清宮衰落の描写がある。

雀卵遺雕栱　雀卵　雕栱に遺し
蟲絲罥畫梁　蟲絲　畫梁に罥はる
紫苔侵壁潤　紫苔　壁を侵して潤ひ
紅樹閉門芳　紅樹　門を閉して芳し
守吏齊鴛瓦　守吏　鴛瓦を齊へ
耕民得翠瑠　耕民　翠瑠を得

この詩は、先の杜牧「華清宮三十韻」詩の和韻詩であり、その詩内容も杜牧詩と同様である。華清宮の衰落描写も同工異曲と言えるが、雕栱に残る雀の卵、畫梁にかかる蜘蛛の巣、壁をびっしりおおう苔、傾いた鴛鴦の瓦、時おり出土する翠瑠などの描写は、典型的であってもやはり奇妙な迫真性を持つ。先の杜牧詩と同じく、この詩もまた、晩唐における華清宮の現状を多分に伝えているものと考えられる。なお、張祜・趙嘏・薛能・温庭筠の四名が重出するこの詩の作者の特定については、『全唐詩』の重篇問題などと共に、別途に論文を構想したく思う。

その他、以下にあげる中晩唐の作品中においても、華清宮の衰落ぶりを縷縷伝える。絶句など字数の制約もあって、今一つ描写が具体的でない憾みが残るが、いずれもやはり先に述べた中晩唐における華清宮描写の流れを汲むものと考えられる。これらは、作者が実際に華清宮の現地に立って詠んだものよりも、伝聞に基づく想像によって描写したものが多いと思われるが、定かではない。いま、主に『全唐詩』によって、その主要なものを挙げれば次の通りである。

①過驪山　　竇鞏（全唐詩　巻二七一）

翠輦紅旌去不回　翠輦　紅旌　去りて回らず
蒼蒼宮樹鎖青苔　蒼蒼たる宮樹　青苔鎖す
有人説得當時事　人の　當時の事を説得ふ有り
曾見長生玉殿開　曾て長生玉殿の開くを見ると

②華清宮二首其一　　盧綸（全唐詩　巻二七九）

漢家天子好經過　漢家の天子　經過するを好み
白日青山宮殿多　白日　青山　宮殿多し
見説只今生草處　見説く　只今　草を生ぜし處
禁泉荒石已相和　禁泉　荒石　已に相ひ和すと

③華清宮　　張籍（全唐詩　巻三八六）

温泉流入漢離宮　温泉は流入す　漢の離宮
宮樹行行浴殿空　宮樹は行行として　浴殿は空し
武帝時人今欲盡　武帝の時人　今盡きんと欲す
青山空閉御牆中　青山に空しく閉づ　御牆の中

④華清宮四首其一　　張祜（全唐詩　巻五一一）[33]

風樹離離月稍明　風樹離離として　月稍く明し
九天龍氣在華清　九天の龍氣　華清に在り
宮門深鎖無人覺　宮門深く鎖して　人の覺る無し
半夜雲中羯鼓聲　半夜　雲中　羯鼓の聲

⑤經古行宮　一作經華清宮　杜牧（全唐詩　巻五二八）

（一作許渾、全唐詩　巻五三六）

臺閣參差倚太陽　臺閣は參差として　太陽に倚り
年年花發滿山香　年年花發きて　滿山香し
重門勘鎖青春晩　重門に鎖を勘し　青春晩れ
深殿垂簾白日長　深殿に簾を垂れ　白日長し
草色芊綿侵御路　草色は芊綿として　御路を侵し
泉聲嗚咽繞宮牆　泉聲は嗚咽して　宮牆を繞る
先皇一去無回駕　先皇一たび去って　駕を回らす無し
紅粉雲環空斷腸　紅粉　雲環　空しく斷腸す

⑥驪山　一作望華清宮感事　許渾（全唐詩　巻五三三）

聞説先皇醉碧桃　聞説く　先皇　碧桃に醉ひ
日華浮動鬱金袍　日華　浮動す　鬱金の袍

風隨玉輦笙歌迥　風は玉輦に隨ひ　笙歌迥かなり
雲捲珠簾劍佩高　雲は珠簾を捲き　劍佩高なる
鳳駕北歸山寂寂　鳳駕　北に歸して　山寂寂たり
龍旗西幸水滔滔　龍旗　西に幸して　水滔滔たり
貴妃沒後巡遊少　貴妃没して後　巡遊少く
瓦落宮牆見野蒿　瓦は宮牆に落ち　野蒿を見る

⑦華清宮三首　崔魯（全唐詩　巻五六七）

草遮回磴絶鳴鑾　草は回磴を遮り　鳴鑾絶ゆ
雲樹深深碧殿寒　雲樹は深深として　碧殿は寒し
明月自來還自去　明月　自ら來りて　還た自ら去るも
更無人倚玉欄干(34)　更に人の　玉欄干に倚る無し

障掩金雞蓄禍機(35)　障（ついたて）　金雞を掩ひ　禍の機を蓄ふ
翠華西拂蜀雲飛　翠華　西に拂ひ　蜀雲飛ぶ
珠簾一閉朝元閣　珠簾　一たび閉づ　朝元閣
不見人歸見燕歸　人の歸るを見ず　燕の歸るを見る

門橫金鎖悄無人　門に金鎖横たわり　悄として人無し

落日秋聲渭水濱　落日　秋聲　渭水の濱
紅葉下山寒寂寂　紅葉　山を下り　寒寂寂たり
淫雲如夢雨如塵　淫雲は夢の如く　雨は塵の如し

⑧再幸華清宮賦（抄）　徐寅（唐文拾遺　巻四五）

解語之珍禽不見　琪樹空高　解語の珍禽見えずして　琪樹空しく高し
長生之白鹿空還　朱扉半掩　長生の白鹿空しく還りて　朱扉半ば掩づ
象薦塵緇　犀屏影移　象の薦は塵に緇み　犀の屏に影移れり
雪衣籠在　霜殿松痿　雪衣の籠は在り　霜殿の松は痿む
雲母波輕　遶殿之清漣自改　雲母の波は輕くして　殿を遶るの清漣は自ら改まり
相思樹老　滿山之紅實空垂　相思の樹は老い　山に滿つるの紅實は空しく垂る

これらの詩賦は、いずれも中晩唐の詩人が華清宮を懐古して詠んだ詩である。[36] 作者が驪山華清宮の現地に立っての感懐を詠んだものか、伝聞にもとづく想像の所産であるのかは定かでない。今一度、その華清宮の衰落に関する描写の部分に「。」印を付すれば如上の通りである。（前①―⑧詩参照）

これらの詩例を一一検討してみると、中晩唐の詠華清宮詩にはある共通したモチーフが存在することに気付く。それは、華清宮の建物や繚垣の零落や当時の遺民の消滅に対比しつつ、樹林や温泉、渭水の不変さが詠まれていることである。換言すれば、生命を永らえる自然の景物に対比して、たちまち消滅する人為の果敢なさが詠まれることである。このことは、蓋し詠華清宮詩のみならず、中国詩歌の根幹に関わる重要な問題であると思われるので、次の終章(2)節において改めて論じてみたい。

六

最後に、以上の論述をもとに、中晩唐における詠華清宮詩について、次の三点からまとめてみることにする。

(1)中晩唐の詠華清宮詩は、華清宮の零落について、どの程度実状を伝えているか。

(2)中晩唐の詩人が華清宮の零落に見たものは何であったのか。つまり、中晩唐の詠華清宮詩の主題は何か。

(3)中晩唐の詠華清宮詩は、楊貴妃文学史の展開上において、どのような意味と役割を持つか。

(1)

中晩唐の詠華清宮詩が、零落した華清宮の実状をどの程度伝えているかについては、上来縷縷述べ来った様に、華清宮をめぐる破壊の史実や宋代の各種記述資料から推しても、基本的にほぼ詠まれている通りの惨状であったと推測し得る。但し、詩材が典型化する余り、却って実状から遊離する弊は免れない。例えば、鄭嵎「津陽門詩」にいう、

雪衣女失玉籠在　長生鹿瘦銅牌垂
象牀塵凝罨颯被　畫檐蟲網頗梨碑

や、杜牧「華清宮三十韻」詩にいう、

塵埃羯鼓索　片段荔枝筐
鳥啄摧寒木　蝸涎蠹畫梁、

及び、これに和した「華清宮和杜舎人」詩の

雀卵遺雕栱　蟲絲罥畫梁、

更には徐寅の律賦「再幸華清宮」賦中の

象薦塵緇　犀屏影移
雪衣籠在　霜殿松痿

等々の描写は、表現が具体的ではあるものの、典型化の要素が色濃く、却って虚構性が強く感じられる。特に徐寅賦の表現は鄭嵎「津陽門詩」の敷き写しであり、現実味は一層薄れる。これらの詩に表現された籠や鹿、象牀、蜘蛛が巣を張った画梁、羯鼓の索、荔枝の筐、栱間の雀卵などは、作者の見たままの表現ではなく、実際には伝聞にもとづく作者の虚構の部分が多いであろう。仮にそうだとしても、これらの諸表現がやはり華清宮の零落を伝えていることに変りはない。

一方、これに対して、草や苔が生えたり、樹木が繁茂したり、相思樹が紅い実をつけたり、温泉が変りなく湧出するといった表現は、やはり典型化してはいるものの、却って華清宮の実態を伝えて迫真性がある。季節毎に繰り返される自然の営みは千古に不変だからである。中晩唐の華清宮が果して実際にどのような情況であったのか、今は誰も知らないし、ここに引用した中晩唐詩人の全てが華清宮の現場を目睹したわけでもない。或いは「津陽門詩」のように、楊貴妃故事を専門に語る語り部がいたのかも知れない。しかしながら、仮にそのような典型化、伝聞化の要素を勘案するとしても、中晩唐の詠華清宮詩は多分に華清宮零落の実態を伝え得ているであろう。華清宮をめぐる唐宋代の記述資料と中晩唐の詠華清宮詩における華清宮の零落描写が見事に符号する事実は、やはり動かし難い情況証拠であり、これら全てが架空の想像によって書かれたとは考えられないからである。

(2)

では、詠華清宮詩の主題、つまり中晩唐詩人が華清宮の零落に見たものは何であったのか。私はそれを、繰り返し蘇生する自然に対する、二度と回復し得ない地上の栄華への哀惜であるとして考えてみたい。

盛唐玄宗の天宝時において、驪山中復に豪奢を極めた華清宮が築営されたことは確かな史実である。そしてまた、

安禄山の乱等の歴史事変を経て、それが見る影もなく衰残したのは、中晩唐期の現実である。中晩唐の詩人は、この零落した華清宮の現実を詩に詠むときに、しばしば月や川や樹木や温泉など、恒久不変の自然現象に対比しつつ、華清宮の栄華の跡を回顧する。例えば、

- 新豊樹老籠明月　紅葉紛紛盖欹瓦　（白居易「江南遇天寶楽叟」）
- 緑苔重重封壊垣　満山紅葉鎖宮門　（白居易「梨園弟子」）
- 唯見蒼山起煙霧　（韋応物「温泉行」）
- 満山紅實垂相思　飛霜殿前月悄悄　（鄭嵎「津陽門詩」）
- 殿葉半凋霜　逆水傾瑤砌　（杜牧「華清宮三十韻」）
- 紫苔侵壁潤　紅樹閉門芳　（張祜？「華清宮和杜舎人」）
- 蒼蒼宮樹鎖青苔　（竇鞏「過驪山」）
- 見説只今生草處　禁泉荒石已相和　（盧綸「華清宮」）
- 温泉流入漢離宮　宮樹行行浴殿空　（張籍「華清宮」）

○風樹離離月稍明　（張祜「華清宮」）
○年年花發滿山香
草色羊綿侵御路
泉聲嗚咽繞宮牆　（杜牧「經古行宮」）
○龍旗西幸水滔滔
瓦落宮牆見野蒿　（許渾「驪山」）
○草遮回磴絶鳴鑾
雲樹深深碧殿寒
明月自來還自去
不見人歸見燕歸
紅葉下山寒寂寂　（崔魯「華清宮三首」）
○相思樹老
滿山之紅實空垂　（徐寅「再幸華清宮賦」）

等々の表現がそうである。これらの詩に典型的に用いられる明月・煙霧（ゆけむり）・紅葉・紅実・紅樹・相思樹・宮樹・苔・草・温泉・花・野蒿・燕・…等々の詩語は、いずれも年年歳歳、繰り返し再生しつつ恒久的に存在する自然の景物である。今少し件件しく説明すれば、明月や温泉（その湯煙り）は玄宗楊貴妃の当時と何ら変りなく、今も現実に機能している景物であり、紅実・紅樹・相思樹は玄宗楊貴妃の当時と変りなく、季節が来れば赤い実をつける。（紅葉は寂寞の貌であるが、やはり不変に繰り返される。）　宮樹・草・苔・野蒿は、玄宗楊貴妃の当時よりも更に勢いよく繁茂して、自然の生命力を見せつけている。草・苔・蒿は野生そのものであり、人為が消滅して野生がはびこることになる。

中晩唐の詠華清宮詩を読むと、これら生命たくましい自然の景物に対比されて、一たび零落して二度と回復しない華清宮の惨状が一層鮮明になって来るのである。

国破れて山河在り、城春にして草木深し

とは、安禄山乱直後の長安を詠んだ杜甫の詠懐であったし、

夏草や兵(つはもの)どもが夢の跡

とは、平泉の栄華を回顧した芭蕉の感懐であった。また、去って二度と帰らぬ人間の青春を詠嘆して、

年年歳歳花相似、歳歳年年人不同

と詠んだのは唐・劉希夷の「代悲白頭翁」であった。いずれも悠久の自然に対比して、人為のはかなさを描く。中晩唐の詠華清宮詩においても、度重なる歴史事変を経て零落して二度と収復しない華清宮の栄華を描くのに、作者はことさらに、毎年季節が巡れば変らず蘇生する自然の景物を対比させているように思える。蓋しこの手法は、中国詩のみならず古今東西の文学作品において常用される手法でもある。翻って言えば、華清宮の栄枯盛衰の歴史が、それだけ中晩唐（のみならず歴代）の詩人に恰好の詩材を提供したということであろうか。

(3)

最後に、中晩唐の詠華清宮詩と楊貴妃故事との関係について一瞥したい。白居易の「江南遇天宝楽叟」や「梨園弟子」詩、それに鄭嵎の「津陽門詩」等に共通して明らかなことであるが、中晩唐においては、所謂「天宝の遺民」が古老としてまだ生き延びており、生々しい楊貴妃故事の語り部として機能していたことが指摘できる。[37] 中晩唐において華清宮は零落してしまい、盛唐の栄華はただその面影を偲ぶだけであったが、中晩唐まで生き延びた天宝の遺民は、盛唐の生き証人として、むしろ積極的に自分の青春の思い出たる楊貴妃故事を聴衆に語り聞かせたのである。先にあげた中晩唐詩人の詠華清宮詩の詩材の供給源は、伝聞の又伝聞も含めて、多くそれら盛唐の遺民であったと考えられ

る。宋・張舜「驪山記」[8]中に登場する古老も、そのような華清宮楊貴妃故事の語り部の子孫である。このような盛唐の遺民の語りを通して、更にはそれら生き証人の盛唐の証言を欲する中晩唐詩人の願望が重なり、華清宮をめぐる楊貴妃故事は、中晩唐期において伝説化され、発展していったことが考えられる。所謂見た、聞いたの時代から伝聞伝説の時代へと推移するのである。

やがてこれらの楊貴妃故事は、白居易「長恨歌」、陳鴻「長恨歌伝」、鄭嵎「津陽門詩」、宋に入っては楽史「太真外伝」、張舜「驪山記」、秦醇「温泉記」[8]のような作品に結実してゆくことになる。これらの作品群には、いずれも楊貴妃を含めて華清宮の栄枯盛衰が描かれているが、その故事のそもそもの供給源を遡れば、これら「天宝の遺民」の語りに行き着くことは、楊貴妃文学史上の展開から見ても重要な事実である。

（一九八九年十一月）

註

（1）『驪山華清池趣話』（孫向東等　陝西人民美術出版社　一九八五年）一一頁。
（2）中華書局、一九八三年。
（3）『全唐文』巻六一二所収。
（4）丁如明輯校『開元天宝遺事十種』（上海古籍出版社　一九八五年）所収。
（5）上海古籍出版社、一九八五年。
（6）中華書局、一九八七年。唐宋史料筆記叢刊之一。
（7）『筆記小説大観』（台北新興書局　一九七三）六編二冊所収。
（8）上海古籍出版社、一九八三年。宋元筆記叢書之一。
（9）『宋元地方志叢書』（中国地志研究会　一九七八年）所収。
（10）同右註（9）。

(11)『唐大詔令集』巻七四、『全唐文』巻三四所収。
(12)『金華叢書』所収。
(13)『陝西通志』巻九一芸文所収。
(14)唐・姚汝能『安祿山事迹』巻下に、「(天寶十五載六月)十四日潼關失守。……十五日聞於朝廷、……十六日玄宗幸蜀。十七日陷西京。」とある。(干支表記を省いた。)
(15)同じく『安祿山事迹』巻上に、「(天寶)九載、…是秋、祿山將入朝、乃令於温泉爲祿山造宅。」とある。
(16)但し、玄宗(明皇)は長安へ還御した翌七五八年十月、華清宮へ単独で赴いている。『資治通鑑』巻二二〇参照。
(17)また『資治通鑑』巻二二四、大暦二年(七六七)の条、さらに清・顧炎武『歴代宅京記』巻六参照。
(18)『長安志』巻十及び『唐会要』巻四八では、破壊の対象を華清宮の「觀風樓」だけに限定する。ここでは『旧唐書』巻一八四の記述に拠って論を進めた。なお『新唐書』巻二〇七は「華清宮樓榭」とする。さらに章敬寺の建立年について、『長安志』巻十は大暦元年とする。小野勝年『中国隋唐長安・寺院史料集成』(法藏館　一九八九年)史料篇三二七頁、解説篇一一二頁参照。
(19)『全唐文』巻七六所収。
(20)亀川正信「会昌の廃仏に就いて」(『支那仏教史学』第六巻第一号　昭和十七年)、笠間達男「会昌廃仏と李徳裕」(『史潮』第六二・六三合併号　一九五七年)を含む会昌廃仏関係論著、及び円仁『入唐求法巡礼行記』関係論著訳注書参照。
(21)『全唐詩』巻五六七所収。
(22)この年一月に憲宗は崩御し、穆宗が即位した。
(23)『全唐文』巻六五一、及び『元稹集』(冀勤点校　中華書局　一九八二)巻三四。
(24)『樊川文集』(上海古籍出版社　一九七八年)、また『文苑英華』巻六七六、『唐文粹』巻八三、『全唐文』巻七五二所収。
(25)『白氏文集』巻四、〇一四五詩。
(26)『白氏文集』巻十二、〇五八二詩。
(27)『白氏文集』巻十九、一二九〇詩。
(28)拙稿「韋応物の『驪山行』『温泉行』詩について」(『文学研究』八六　九州大学文学部　平成元年)参照。
(29)『樊川文集』巻二。

(30) 人民文学出版社、一九八〇年。
(31) 清水茂「杜牧と伝奇」(京都大学『中国文学報』一、一九五四年)、また同氏著『中国詩文論叢』(創文社　一九八九年)参照。
(32) 張祜作は『全唐詩』巻五一一、趙嘏作は『全唐詩』巻五五〇、薛能作は『全唐詩』巻五五九、温庭筠作は『温飛卿詩集箋注』(清・曾益等箋注　上海古籍出版社　一九八〇)巻九、集外詩参照。なお、四者ともに引用部分は同一表現である。
(33) また温庭筠『温飛卿詩集箋注』巻九、集外詩、「華清宮二首」其一に同じ。註(32)「華清宮和杜舎人」に続いてこの詩を録する。
(34) 李白「清平調詞」其三に、「解釋春風無限恨、沉香亭北倚闌干」と。
(35) 『旧唐書』巻二〇〇上、安祿山伝に、「上御勤政樓、於御坐東爲設一大金雞障、前置一榻坐之、卷去其簾。」と。
(36) ここには挙げなかったが、元稹が玄宗楊貴妃の行宮の一つ連昌宮について詠んだ「連昌宮詞」(『元稹集』巻二四)にも、次のようにその零落ぶりを描写した表現がある。

荊榛櫛比塞池塘　狐兔驕癡緣樹木
舞榭歌傾基尚在　文窗窈窕紗猶緑
塵埋粉壁舊花鈿　烏啄風箏碎珠玉
上皇偏愛臨砌花　依然御榻臨階斜
蛇出燕巣盤鬪拱　菌生香案正當衙

この表現は、先にあげた鄭嵎「津陽門詩」、杜牧「華清宮三十韻」、及び張祜又は趙嘏又は薛能又は温庭筠の「華清宮和杜舎人」詩における華清宮の零落表現に酷似する。両者の直接の影響関係は認め難いが、要は、華清宮にしろ、連昌宮にしろ、盛唐玄宗の遺跡が中晩唐において此の如く衰落していたことであろう。
(37) 拙稿「白居易と天宝の遺民」(『文学研究』八四　九州大学文学部　一九八七)参照。